



▼Requiem æternam dona eis, Domine, et lux perpetua luceat eis.▼

主よ、永遠の安息を彼らに与え、絶えざる光でお照らしてください。

校長 小田 恵



衣笠墓地にて

11月4日(金)、保護者の金曜日宗教研究のメンバーの方々、衣笠にあるカトリック墓地を訪れ、ウィリアム神父様ご指導のもとヴィアートル修道会の方々の魂の安息を祈ると同時に感謝の祈りを捧げました。

11月はカトリックでは死者の月です。11月2日は「死者の日」とし、亡くなったすべてのキリスト者を記念します。死は、生きている私たちにとっては、恐ろしく悲しいものですが、キリスト教においては、死によって神のみもとに帰り、永遠のいのちにあずかるということですから、亡くなった人の魂が永遠に安らかに憩うように祈りを捧げるのです。学校としては、11月24日(木)に中学校と高校とに分けて追悼ミサを行い、ご遺族や同窓生とともに亡くなった本校ゆかりの方々のことを思い、祈ります。

死者は、生者が亡くなった方のことを思うということで永遠の命を得られる、と私は中学の頃から考えていました。もちろん私がカトリック信者であったことも素地にはあるでしょうが、書物(漫画や小説など)からの影響が少なからずあったように思います。

中学3年生の頃、友人から借りた漫画「トーマの心臓」(萩尾望都作)のなかに、「人は二度死ぬという まず自己の死 そしてのち 友人に忘れ去られることの死」というフレーズがありました。このフレーズは、漫画の内容とともに非常に深く心に刻まれました、近年、「人は二度死ぬ。肉体の死と人の記憶から消滅するという死」に似た内容は、アニメ『ワンピース』を始め、多くの人の口に上るようになったようです。中学時代、『アンネの日記』の中に、私は死んであとも生き続けるよ

うな仕事がしたい…といった内容と似ているな、と感じたもののはっきりとその文言を確かめずにそのままにしていました。先日、『アンネの日記』を何十年かぶりに開いてみると、1944年4月5日の記述に以下のように書かれていました。

「わたしは世間の大多数の人たちのように、ただ無目的に、惰性で生きたくはありません。周囲のみんなの役に立つ、あるいはみんなに喜びを与える存在でありたいのです。わたしの周囲にいながら、実際にはわたしを知らない人たちにたいしても、わたしの望みは、死んでからもなお生きつづけること！その意味で、神様がこの才能を与えてくださったことに感謝しています。このように自分を開花させ、文章を書き、自分のなかにあるすべてを、それによって表現できるだけの才能を！」

(文春文庫『アンネの日記』アンネ・M・フランク)

「私の望みは、死んでからもなお生きつづけること！」

なんと力強いことばなのでしょう。中学当時、自分もこんなふうに言ってみたくは思っていたな、と記憶も蘇ってきました。

このアンネの切なる願いは叶えられ、80年たった今でもアンネの文章は輝きと重みを失っていません。むしろ、現代こそ、ミサイルが空を飛び、各地で紛争・戦争が絶えない今こそ、私たちはアンネのメッセージの重みを真摯に受けとめるべきではないでしょうか。

11月。生きている私たちは死者を思い、祈ります、死を思うことは生を思うことに他ならないのかもしれない。

亡くなったすべての方々と生きているすべての人々に、魂の平安が訪れますように。